

特集「東京とオリンピック・パラリンピック」

「復興五輪」の歴史的根拠を求めて¹

大 林 太 朗（筑波大学体育系助教）²

Abstract

The great Kanto Earthquake of 1923 striking Tokyo city was one of the largest scale disasters in the history of Japan. This paper focuses on the “Imperial Capital Recovery Memorial Games” (24-28 March 1930) which was held to celebrate the recovery completion and express gratitude to those who contributed to the recovery from the disaster. With the results of document analysis, it is concluded that this sport event could be one of the historical facts of “Reconstruction Olympics” : Tokyo 2020 appeals the reconstruction of areas damaged by the Great East Japan Earthquake in 2011.

抄録

本稿は、2020年の東京大会が「復興五輪」として位置づけられていることの歴史的根拠として、関東大震災（1923年）後の東京市における体育・スポーツの状況、特に1930年の帝都復興記念体育大会の内容を明らかにしたものである。主に東京市公刊史料と新聞資料を用い、同大会で実施された5日間17競技、特に「復興完成通路マラソン」について分析を行った。結果、同大会は関東大震災からの復興を記念し、国内外からの援助に対する感謝を示すという、まさに今回の「復興五輪」の一つのルーツともいえる大会であったことが示唆された。

キーワード：関東大震災、東京市、復興、体育・スポーツ、オリンピック

はじめに

本稿は、2020年1月23日に開催された日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所主催のセミナー「スポーツの祭典の継承－オリンピック・パラリンピックを考える－」での報告内容に基づき、2020年の東京大会（新型コロナウイルス感

染拡大に伴い来年に延期となったが）が2011年の東日本大震災からの「復興五輪」として位置づけられていることの歴史的根拠を探ろうとするものである。

そもそも「復興五輪」のコンセプトは、「日本が東日本大震災から復興している姿を発信し、世界への返礼の場とする」¹という理念の下に、例

¹ Historical background of Tokyo 2020 as “Reconstruction Olympics”

² Obayashi Taro, Assistant Professor of Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

えば「復興の火」と銘打たれた聖火リレーや一部競技の被災地開催（宮城県：サッカー，福島県：野球・ソフトボール），また復興をテーマとする教育・文化プログラムなどを通して，オリンピック・パラリンピックを東北復興のシンボルにしようというものである²⁾。

しかしながら，このコンセプトについては一部に批判的な向きもあり，「大会関連の建設ラッシュが復興事業に支障をきたす」，「原発事故の被害が風化させられる」といった懸念とともに，「招致を成功させるために復興をスローガンとして利用しただけだ」と指摘されることもあった³⁾。いよいよ大会本番を迎えてその真価が問われるが，本稿では，このことに関する一つの史実を取り上げてみたい。

取り上げるのは，関東大震災（1923年）から6年半後に東京市で実施された「帝都復興記念体育大会」（1930年3月24日～28日）である。「戦前における，スポーツ全盛の時代」⁴⁾に開催されたこの大会は，いわば「復興五輪」のルーツとも捉えられるような，画期的なスポーツ・イベントであった⁵⁾。まずは関東大震災後の東京市における体育・スポーツの状況（背景）を整理した上で，同大会の内容を分析したい。

関東大震災後の東京市における体育・スポーツの状況

1923年9月1日に発生した関東大地震は，首都圏を中心に死者・行方不明者10万人余，住居焼失者200万人規模の甚大な被害をもたらした。特に被災の中心となった東京市では死者58,104名，行方不明者10,556名の人的被害とともに，火災によって市域の約半分を焼失するという壊滅的な被害を受けた。この状況について，東京市発行の資料では次のように記録されている。

激震一度至るや邸宅・商家・向上等随所に崩壊し，加ふるに市内百有余箇所に発したる劫火は旋

風の渦を巻き，真紅の舌端其の猛威を揮ひ，凄滔天を焦すこと三日，遂に帝都の主要部は全く焦土と化し，市民悉く財を捨て僅かに身を以て難を逃れ，或は後れて焼かるる者，或は免れて水に溺るる者，忽ちにして死傷数万と算せらる，此の時に当りて交通・通信の諸機関は全く杜絶し，水道・電灯・瓦斯の諸設備亦壊滅し，食糧その他の需要品盡く欠乏し，恐怖と絶望は全市民を戦慄せしめたり…今にして真に東西古今を通じ未だ曾てみざるの大惨害なりしを知るべし⁶⁾

資料記載の文字を追うだけでも，火災旋風の猛烈な勢い，ライフライン停止による厳しい状況が推察される。このような事態に際し，被災者救護や復興に向けた各事業の陣頭指揮をとったのが当時の市長，永田秀次郎であった。永田は後藤新平（震災後には帝都復興院総裁）の後任として市長に就き，後に東京オリンピック（1940年）の招致に関わる人物でもあるが，ここで特筆したいのは，その永田が復興に向けた指針の一つとして「市民体育」の必要性を論じていたことである。

健康は人間活動の源泉であり運動は健康を増進する積極的方法である。…特に我が東京市民は大震災火災の後を受けて日夜營々として帝都の復興に努力しつつあるのであるが，此事たる長年月の忍苦持久の力を要するのであつて，之が為めには是非とも強固なる精神と頑健鍼の如き肉体の持主であり度い。此点から見て市民体育の作興は刻下の急務であると云はねばならぬ⁷⁾

ここでは，復興に必要となる「強固なる精神と頑健鍼の如き肉体」を備えるという趣旨で体育の重要性が論じられている。これに関連して，当時，東京市役所で「市民体育ニ関スル事項」⁸⁾を担った社会教育課が発行した「体育振興パンフレット」（10万部発行，市民に広く配布された）には，「お互の健康が復興の礎であります」，「ウンと身体を練って強い市民になりませう」，「運動

したのがもうけになって今じゃ復興のチャンピオン」との標語が記載されている（セミナー時はパンフレット画像を紹介）。このことから、関東大震災後の東京市では、復興に向けた体育・スポーツへの政策的関心が高まっていたことが確認される。

施策の一例として、1923年11月25日（地震発生から約3カ月後）に上野公園で開催された「慰安運動会」に着目したい（後に取り上げる「帝都復興記念体育大会」とは異なるもの）。この運動会は、東京市社会教育課が「変災に傷悲したる人心を慰安し精神の作興を図る」⁹⁾ ために実施した被災者向けの慰安事業の一つである（図1）。



図1 慰安運動会 東京朝日新聞 1923年11月26日夕刊2面より

史料に限られるが、各紙の記事によれば、東京朝日新聞では「けふ上野のバラック村に賑ふ慰安運動会…拍手、歓声、村の人達は久し振りでノンビリした気分浸って居た」¹⁰⁾、時事新報では「児童の手に成つたらしい紙製の国旗がうららかな秋光に輝く…四五以上女の綱引や、同じく女の孫探し、五五以上男の親子競走や四五以上男の四百米突等は、観衆の人々をして大いに笑はせ、震災以来初めての賑ひであつた」¹¹⁾と報じられている。記事の限りではあるが、震災直後の東京市では確かに、バラック（仮設住宅）で避難生活を送る被災者が体育・スポーツとともに復興を目指す姿が存在したのである。

ここで思い起こされるのは、東日本大震災後の2011年5月22日に岩手県陸前高田市の小学校で実施された、がれきの中の運動会である（セミナー時には時事通信の記事・写真を紹介）。そこでは、周囲に多くのがれきが残るグラウンドを舞台に、徒競走や騎馬戦、さらに保護者らが参加する綱引きなどが実施されたという。被害状況や、そもそも時代の情勢が異なるため一概にいえないが、震災から約3カ月後というタイミングを含めて、そこには関東大震災直後の慰安運動会と通底するものがあつたのではないだろうか。

以下、そのような東日本大震災後の状況との対比を念頭に置きながら、帝都復興記念体育大会の内容を分析したい。

帝都復興記念体育大会

関東大震災から約6年半が経過した1930年3月、政府と東京市は一連の帝都復興事業の完了を記念して帝都復興祭を開催した。その目的は「聖上陛下の御親臨を仰ぎ奉つて復興帝都の実状を奉告して千載一遇の光栄に浴さんことを希ひ、一は内外の廣大なる援助に対し帝都復興を報答し、以て聖事を永く記念せんとする趣意」¹²⁾、すなわち一点目に関東大震災から復興を遂げた東京市の状況を天皇陛下に奉告すること、二点目に国内外からの援助に対して帝都復興事業の完了を報告し、感謝を示すことであつた。

帝都復興記念体育大会は、この帝都復興祭の一つのプログラムとして実施されたものである。主に明治神宮体育会と東京市役員で構成された復興記念体育会が企画・運営を担い、5日間17競技にわたる複合的なスポーツ・イベントが展開された。初日に漕艇、庭球、弓術、二日目に野球、籠球、排球、三日目に陸上競技、体操、ホッケー、蹴球、ラグビー、角力、四日目に水上競技、剣道、拳闘、飛行機、最終日に柔道が行われ、そこでは競技に限らず伝統武術の演武などの文化的行事も含まれていた。

セミナー時には『帝都復興祭志』（1932年、東京市発行）をもとに各競技の様子を紹介したが、本稿では中でも特徴的な「復興幹線通路マラソン」（図2）に着目したい。このマラソンは陸上競技の一種目として、「神宮競技場を出で幹線道路を永代橋に至り同橋を渡り左折し隅田川東岸に沿って隅田公園に至り言問橋を渡り下谷坂本町を左に和泉橋を渡り右に四谷見附を経て四谷●町を左に競技場に帰る」¹³⁾という約27kmのルートで、精鋭45名の学生ランナーが駆け抜けるというものであった。



図2 帝都復興記念体育大会（復興幹線通路マラソン） 東京市役所（1932）帝都復興祭志、p.521. より

この大会について、各紙の報道を引用すると、読売新聞では「復興成った帝都を全くスポーツの都と化した観があつた」¹⁴⁾、東京朝日新聞では「復興の力を表徴するにもつとも意義ある記念事業」¹⁵⁾「世界に類をみない日本人の反ばつ復興力を發揮して居る」¹⁶⁾、そして復興幹線通路マラソンの様子を報じた報知新聞は、ランナーが「復興の市内に発らつたる生気をまき散らした」¹⁷⁾と報じており、総じて市民がこのスポーツ・イベントに参加するその様子を、関東大震災から立ち返った都市の象徴として捉えていたことが読み取れる。換言すれば、当時の人々は帝都復興記念体育大会を通して都市の復興を強くアピールし、国内外からの復興支援に対する謝意を示したのである。

そして、この大会から約3ヶ月後の1930年6月、東京市はオリンピック（1940年）の招致に乗り出した。その発端は市長の永田秀次郎の提唱であったとされる¹⁸⁾。一般的には皇紀二千六百年を記念する行事としてオリンピックに白羽の矢が立ったとされているが、そこには震災対応を指揮した永田が市長として再登板し、帝都復興事業を経て再建された東京市の姿を国内外にアピールするという意図が含まれていたものと考えられる。

実際に、1931年10月28日の東京市会で決議された「国際オリンピック競技大会開催に関する建議」¹⁹⁾には「復興成れる我が東京市に於て第十二回オリンピック競技大会を開催する」と示され、それを受けて永田が斎藤實外相に宛てた上申書には、「本市に於ては既に復興事業完成し市域拡張も決定して着々大都市たるの施設を進め居る」²⁰⁾と、その根拠が述べられている。東京オリンピック（1940年）は結果的に開催されることはなかったが、その招致理念にはたしかに、体育・スポーツとともに復興を成し遂げた東京市の誇りが刻み込まれていたといえよう。

「復興五輪」の歴史的根拠を求めて

ここまで、関東大震災後の東京市における体育・スポーツの状況、特に帝都復興記念体育大会を取り上げたが、あらためて同大会は、関東大震災からの復興を記念し、国内外からの援助に対する感謝を示すという、まさに2020年の東京オリンピック・パラリンピックが目指す「復興五輪」の一つのルーツともいえる大会だったと考えられる。復興幹線通路マラソンは今回の聖火リレー（復興の火）に通じ、また帝都復興祭における様々な文化的行事は、冒頭に触れた東北を舞台とする文化プログラムと重なるものであろう。このような史実を目の当たりにすると、今回の「復興五輪」のコンセプトは、それが意識的であるかどうかは別として、震災大国・日本に生きた先人たちが脈々と受け継いできた経験知に基づいて生み出された

ものなのではないか、そのような思いが湧き上ってくるのである。

歴史学を専攻する身としては些か身勝手な結論となってしまったが、今回の東京大会が、帝都復興記念体育大会の記憶を有する東京都だからこそできる「復興五輪」として実現されることを願い、結びとさせていただきたい。

追記

本稿で取り上げた慰安運動会および帝都復興記念体育大会は、2019年のNHK大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」の第24話（6月23日放送）で演出された「復興運動会」のモデルとなったものである。筆者は、筑波大学体育系の真田久教授の下でこのドラマの時代考証（スポーツ史）を担当し、これが一つのきっかけとなって、本セミナーにおける登壇の機会をいただいた。末筆ながら、主催のオリンピックスポーツ文化研究所の皆様、史料収集にご協力いただいた日本体育大学図書館の皆様に、深く感謝申し上げます。

注

- 1) 東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会（2014）招致活動報告書，p.5.
- 2) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ウェブサイト，オリンピック・パラリンピックと被災地復興，<https://tokyo2020.org/ja/games/caring/>（2020年5月1日閲覧）。
- 3) 小川宏（2014）「復興五輪」はスローガンなのか—東日本大震災と福島原発—，現代スポーツ評論，30：80-87；読売新聞（2019年3月13日朝刊1面）復興五輪招致加速の「源流」；朝日新聞（2019年3月13日朝刊2面），進む五輪準備遅れる復興 人手・資材高騰 工事入札不調相次ぐ。
- 4) 今村嘉雄（1970）日本体育史，p.555，不昧堂出版。
- 5) 帝都復興記念体育大会については，拙稿：Obayashi, T, Sanada, H. (2017) Recovery from the Great Kanto Earthquake of 1923 through Sport Events in Tokyo, Japan. The International Journal of the History of Sport. 33 (14) : 1640-1651. をあわせてご参照いただきたい。
- 6) 東京市役所（1932）帝都復興区画整理誌（第一編：帝都復興事業概観），pp.19-20.
- 7) 東京市役所（1924）市民体育資料，pp.1-2.
- 8) 東京市公報（1921年6月1日）。
- 9) 東京市役所（1930）東京市教育復興誌，p.254.
- 10) 東京朝日新聞（1923年11月26日夕刊2面）心ばかりの紅白を張廻して けふ上野のバラック村に賑ふ慰安運動会。
- 11) 時事新報（1923年11月26日朝刊4面）老人も交つて慰安運動会 けふ上野の賑ひ。
- 12) 東京市役所（1932）帝都復興祭志，p.19.
- 13) 読売新聞（1930年3月6日朝刊6面）復興記念体育大会。
- 14) 読売新聞（1930年3月27日朝刊6面）春光麗らかに照栄え各競技に熱戦続く 復興体育大会第三日。
- 15) 東京朝日新聞（1930年2月5日朝刊7面）復興記念の競技会 開催に決定。
- 16) 東京朝日新聞（1930年3月25日夕刊1面）復興体育大会 隅田コース競艇の天覧にアスリーツの感激。
- 17) 報知新聞（1930年3月27日2面）復興体育大会 神宮外苑に生氣漲る。
- 18) 東京市役所（1939）第十二回オリンピック東京大会東京市報告書。同書には、「オリンピック大会東京招致運動の発端」として、永田秀次郎が山本忠興（世界学生陸上競技選手権大会総監督）に対しオリンピック開催に係る欧州の状況を調査させたことが挙げられている（p.3）。

- ¹⁹⁾ 同上, p.4.
- ²⁰⁾ 中川隆編 (2009) 近代オリンピック競技大会
資料集成 第三巻, pp.2-7 (1932年6月10日
付 東京市長永田秀次郎ヨリ 外務大臣子爵
齋藤實宛て書簡 (上申書)).
(受理日:2020年6月18日)